# 魔導新世紀リリカルなのはＦＵＴＵＲＥ

マテマテフェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導新世紀リリカルなのはＦＵＴＵＲＥ

【Ｎコード】
Ｎ０７６６Ｓ

【作者名】
マテマテフェイ

【あらすじ】
時空管理局のエース・オブ・エース高町なのはの遺志を継ぎ、ヴィヴィオは多くの事件を解決する。そして、次元世界の消滅の危機に最期の審判が下される

この話は、魔導新世紀リリカルなのはシリーズの最終章です。
まだ未熟な作者ですが、どうぞ最後まで楽しんでください

# 第1話それは、永遠の別れなの？（前書き）

キャラクターの喋り方や名前が違う場合があります

## 第1話それは、永遠の別れなの？

春…色々な別れが来る季節、なのは達は未だに世界を救う為に消えたリュウ・スウェンの事を思っていた。
彼が消えてもう3年の月日が流れ、徐々に彼の居た事さえ、幻となっていった。それでも、なのはやヴィヴィオは、いつの日か彼が帰ってくる事を望み、今を強く生きていた。
新暦８８年、４月３日…高町家…なのはにヴィヴィオは、ミッドチルダから引っ越しをする準備を進めていた。昨日、辞表を出して、なのはもヴィヴィオも魔法とは、元々無縁であった海鳴市で暮らす事を決意していた。
「そうか…ここを辞めるのか」
寂しそうな顔つきでクロノは、なのはから渡された辞表を受け取る。なのはが、いなくなるのは寂しかったが、それも仕方の無い事だと、割り切って大事そうに辞表をしまい、今までの実績に合わせた、お金をなのはに手渡す。
「すいません…わがままを言ってしまって」
「君が決めたのなら、俺から言う事は何もない…向こうでも元気でな」
最後に一礼をして、静かにドアが閉められて、なのはの足音が消えていく。クロノは彼女の個人データを万が一の時の為、自分のＵＳＢメモリーに保存して、全てのデータを削除する。今まで彼女が、してきた事、失敗した事なども全てのデータが、塩が水に溶けて行くみたいに消えて行った。
そして、なのは達は、誰にも言わずに荷物を整理して、時空ステーションへと向かう。既に管理局を辞めた、なのはに無料券は無くなっており、地球までの切符を購入後、駅構内へと入る。
（さようなら…皆…元気でね）
「間もなく、地球行きの列車が来ます…ご搭乗の際は、段差に気を

付けてください」
自分達を最後に乗せる列車が来て、なのはとヴィヴィオは段差に気を付けながら、搭乗する。列車内にいる車掌さんに搭乗券を見せて確認をして貰う。確認が完了すると、なのはとヴィヴィオは、シートベルトを着用して、列車は動き出す。
「なのはママ…本当にいいの…リューナの事？」
「今の私は、色々と、おかしいから…だからリューナの傍には居たくない」
ヴィヴィオには、なのはの気持ちが痛いほど分かった。最愛の人を亡くした悲しみ、そして唯一出来た繋がりを、自ら拒絶する苦しみそして、皆と笑いあえる日々を無くす苦しみその全てが、ヴィヴィオには分かっていた。本来なら、ヴィヴィオもミッドチルダに残る予定だったが、自分自身の母親が苦しんでいるのを、放っておけずに、自らの意思でなのはについて来ていた。
「なのはママ、向こうでも友達できるかな？」
「ヴィヴィオなら平気だよ…なのはママは、少しだけ寝るね…」
それが、なのはの最期の言葉だった。既に冷たくなった体がヴィヴィオに横たわる。アナウンスが聞こえて、なのはを揺らしても返事は無い。それから2分、心配になった駅長さんにより、ヴィヴィオと既に体は冷たく、生気を感じない、なのはの二人は、病院へと運ばれた。
「嘘だよね…なのはママ、目を開けてよ…ママ！！」
涙を溢しながら、ヴィヴィオは何度も何度も人工呼吸をする。その光景に、多くの看護婦や医師は涙を流す。止めようにも、なのはの死を受け入れられないヴィヴィオは、取り押さえる看護婦の腕を振りほどき、なのはを見る。本当の娘じゃなかったのに、自分に優しく接してくれた、あの日々を思い出しながら、少しずつ現実を受け止めて行く。
「なのはママ…リューナと一緒に過ごしたかったんだよね…パパや皆ともっと生きたかったんだよね」

なのはには、分かっていた。自分の命が残り少ない事も、皆と過ごせない事も、そしてリューナに悲しい思いをさせることも全て理解していた。だからこそ、残り少ない命を、故郷で生きる事に決めていた。

「さようなら…なのはママ…今まで、ありがとう。大好きだよ！！」

最後の別れを済まして、ヴィヴィオは迎えに来た美由紀に今までであった事を話す。美由紀も大体の事は、聞いていた為に、理解は出来た。

「ありがとうございました…」

「我々は何もできなかった…」

「なのはには、分かっていたんだと思います。それじゃ、失礼します」

ヴィヴィオの腕を握って、美由紀も涙を流しながら帰っていく。

それから3日後、なのはの葬式も終わり友人のアリサやすずかは、涙でなのはに別れを告げていた。

「ヴィヴィオは、これからどうするの？」

「迷惑をかけるかもしれませんが、なのはママの遺志を継ぎたい！！」

その眼に迷いはなく、美由紀はヴィヴィオにある物を渡す。それは、なのはがヴィヴィオに渡す為に持っていた小さい袋だった。袋を開けると、レイジングハートにセイグリッドハートさらに一枚の手紙と写真が入っていた。

「なのはママ、ありがとうね…」

手紙に書かれていた内容は、ヴィヴィオを管理局の魔導師に認定すると言う事だった。ヴィヴィオは、美由紀に訳を話して、なのはと別れた駅へと来る。最後に海鳴に別れを告げて、ヴィヴィオはミッドチルダへと向かった。

## 第1話それは、永遠の別れなの？（後書き）

新暦９０年…新たな脅威が迫る中、ヴィヴィオは、なのはの遺志を継いで、戦っていた。
次回　魔導新世紀リリカルなのはＦＵＴＵＲＥ　第２話閉ざされた平和な時なの？
新たな魔法少女は多くの遺志を継いで、空を舞う
次回も、お楽しみに～～～

## 第2話閉ざされた平和な時なの？

新暦９０年、ヴィヴィオは立派に、時空管理局の魔導師として、実績を積み上げていた。なのはの遺志を継ぎ、機動六課のエース・オブ・エースとして日々を生きていた。仲間であるフェイト・Ｔ・ハラオウンやティアナ・ランスターなどの優秀な魔導師の指導の元に、ここまでの実績を上げられて、今では機動六課のスターズ部隊、隊長を任されるほどの魔導師に育っていた。

「ただいま～～～」

現在のヴィヴィオは、なのはとリュウが残した一人息子である【高町リューナ】と共に暮らしていた。まだ5歳のリューナには、なのはの死を告げずにヴィヴィオとリューナは仲よく生きていた。

「リューナ、ご飯すぐに作るからね」

帰ってきたばかりだと言うのに、ヴィヴィオは管理局の制服を脱いで、いつもの服装に戻って、なのはの愛用していた可愛らしいウサギのプリントされたエプロンを身につける。そして台所に立ち、包丁を握る。何年もリュウやなのはの包丁さばきを見ていた為に飲み込みも早く、現在では作れる料理のバリエーションもかなりの数だった。

「はい、リューナ…夕ご飯だよ」

丁寧に並べられたお皿の上には、おいしそうに湯気を上げているポテトコロッケに付け合わせのキャベツが乗っていた。さらにヴィヴィオは、お味噌汁を器に入れて、リューナの前に持ってくる。

「熱いから気を付けてね…リューナ」

静かに頷いた後、リューナはヴィヴィオが用意してくれた夕ご飯を食べて行く。本当に美味しそうな食べ方をするリューナにヴィヴィオは少しだけ笑みが零れる。リューナのヴィヴィオに気がついたのか、こちらを見て笑顔で笑いかける。その表情に自分では表現の出来ない気持ちが襲って、ヴィヴィオも自分の気を紛らす為に、ご飯

を食べて行く。
「ヴィヴィオお姉ちゃん…まだ、お仕事があるの？」
「リューナの心配する事じゃないよ…お休み」
何時も、なのはが自分にしてくれた事がすっかり習慣となってしまい、寝る前には額にキスをしていた。最初の頃は、それだけでリューナに警戒されたが、今ではヴィヴィオがキスをしなければ寝てはくれない程だった。一種の習慣となった寝る前の呪文を終えて、リューナは、一人が寝るには大きすぎるベッドで横になる。ヴィヴィオは、はやてより頼まれた仕事を終えて、パソコンの電源を切る。
「もう今日は疲れちゃったし、掃除は明日にしようっと」
後片付けをして、ヴィヴィオも自分の布団に入る。何故か自分のママとパパの匂いがして、ヴィヴィオは誘われるように、深い眠りへとついた。そして翌日…朝の出勤時間に、なっても起きてこないヴィヴィオにリューナは、違和感を感じる。そして、誘われるがままにヴィヴィオの居る寝室へと入る。何故か、ヴィヴィオ以外の人物の気配も感じる事が出来たが、それが誰なのか分からずに、リューナは大好きなお姉ちゃんであるヴィヴィオを揺らす。
「ヴィヴィオお姉ちゃん、朝だよ？」
違和感を感じながらも、リューナはヴィヴィオを揺らす。だが既にヴィヴィオの体は冷たくなって、顔からも生気が消えていく。それでも、まだ幼いリューナには、人の死が分からずに、いつもの様な笑顔を見たいと言う無邪気な願望で、必死にヴィヴィオを起こそうとする。
「お姉ちゃん…仕事、遅れちゃうよ！？」
何かが、リューナの腕に付着して、リューナは恐る恐る赤い液体を自分に眼前へと近づける。そして、それがヴィヴィオの血だと理解するまでに、それほど時間は、かからなかった。だが、直ぐには【死】と言う言葉を認識出来ず、理解する事さえ困難だった。
「ヴィヴィオお姉ちゃん…血が出てるよ、病院に行かなくちゃ」
だが、身長差のあるヴィヴィオをリューナが背負える訳も無く、家

の中を探し回って、ある電話番号に電話をする。しばらくしてから、聞き覚えのある声が聞こえて、リューナは今の状況を出来るだけ分かりやすく教える。すると、電話に出ているフェイトは、有無を言わずに電話を切って、上司である八神はやてに訳を分かりやすく話した後、最悪の事態を考えながら、リューナの待つ高町家へと向かう。

「リューナ、フェイトだよ…開けてくれる？」

階段を下りてくる音が聞こえて、ロックが外れる。その後、リューナにヴィヴィオの居る場所まで、案内してもらいヴィヴィオの容態を確認する。既に大量の血で、布団は赤く染まって、フェイトは、リューナに真実を打ち明けるかどうか悩む。5歳のリューナにとって、最も信頼する、お姉さんの死を伝えれば、暴れる事が目に見えていたからだ。

（でもこのまま何を伝えなければ…リューナにもっと辛い思いをさせる事になるかもしれない）

チラッと、リューナの方を見る。幸いに、まだリューナは死んだ事に気づいておらず、フェイトは最善の策を考える。だが、リューナに真実を伝える以外に方法が思い浮かばずに、既に肉体も死んでいる筈なのに、血が流れ続けるヴィヴィオの体を近くにあった布で固定する。そしてリューナに、向きなおりヴィヴィオが死んだ事実を伝えようとする。

「リューナ…ヴィヴィオは、もう目覚めないんだよ…」

まだ【死】と言う言葉を素直に受け入れられない緑の瞳は、フェイトを真っ直ぐに見つめる。フェイトの赤い瞳も、リューナの瞳を真っ直ぐに見つめて、話を続ける。フェイトの言葉の内容が少しずつ理解できるようになり、緑色の瞳には、涙が溢れる。

「お姉ちゃんと、もう話す事も出来ないの？」

静かにフェイトは頷く。リューナは初めて感じる人の死に恐怖を感じながらも、既に動かないヴィヴィオの頬を触る。昨日のキスが、最期のヴィヴィオがくれた物だった。

「リューナ…悲しいなら、泣いていいんだよ？」
無理やりに涙を我慢しているように見えたフェイトは、まるで我が子を包むかのようにリューナに自分の温もりを渡す。懐かしい温もりに抱かれてリューナは、涙を流す。フェイトは、何も喋らずにただリューナを抱いていた。

## 第2話閉ざされた平和な時なの？（後書き）

最愛の家族の死それを乗り越えた少年は、世界の為に戦う事を決意する…

次回　魔導新世紀リリカルなのはＦＵＴＵＲＥ

第３話大事な人の遺志を継ぐ…宿命なの…

新暦１００年…新たな時代で、多くの悲しみを知る少年は、世界の為に飛び立つ

次回もお楽しみに～～～

《主人公はリューナです。ヒロインは、次回登場？》

## 第3話大事な人の遺志を継ぐ…宿命なの…（前書き）

今回から本編がスタートです
では、どうぞ！！

## 第3話大事な人の遺志を継ぐ…宿命なの…

新暦１００年…１５歳となったリューナは義理の母親であるフェイトの元で、立派に育っていた。
聖魔導学園に通い魔法の知識などを勉強しながら、鉄槌の騎士ヴィータや烈火の将シグナムなどとの模擬戦もこなしていた。フェイトは、リューナが時空管理局に入る事に反対していたが、はやてやリィンの推薦で、時空管理局で働くことが決まっていた。その為にフェイトは、リューナに相応しいデバイスの製作をシャーリーに頼んでいた。
「シャーリー…私は本来、あの子を戦わせたくはない」
「優秀な魔導師それを遊ばせておく余裕は、今の私達には有りませんよ…」
シャーリーの言う事も最もだった。今の管理局は多くの優秀な魔導師を失っている為に、聖剣士とエース・オブ・エースの血を受け継ぐリューナに拒否権など存在しなかった。だが、これ以上リューナに悲しみを覚えて欲しくない…その気持ちが揺らぐ事は無かった。
「やっぱり戦いに子供を巻き込むのは、いけない事だよね？」
「戦う兵士に子供も大人も関係ありませんよ…戦場に出れば、全員同じ兵士なんですから」
デバイスの最終設定を完了し、シャーリーはフェイトにリューナ専用の【インテリジェントデバイス】を渡す。フェイトは、やり切れない思いでシャーリーの手渡したデバイスを受け取る。デバイスを通じて、フェイトの苦しみがシャーリーにも理解出来た。だが、今の自分ではどうする事も出来ずに、ただ涙を流しながら出て行くフェイトを見送るしかなかった。
（リューナ…私は君に戦って欲しくない…君は二人が命を賭けて残した、たった一つの生命（いのち）だから…）
望まぬ願い…その事は、十分にフェイトにも理解は出来た。だが自

分自身でリューナにデバイスを渡す事を拒んでいた。そんな事をしている内に、リューナが訓練をしている八神家へと来る。今回のッ稽古の相手はアインハルトで、リューナはボロ負けしていた。
「また負けちゃった…」
「確実に強くなっていますね…」
手を差し出され、リューナは少し顔を赤くしながらアインハルトの腕を掴んで立ち上がる。リューナが砂を払うと綺麗な水色と少し紫色の瞳がリューナの緑の瞳に映る。慌ててリューナは、顔を逸らしアインハルトの様子を窺う。左右の色が違う美しい瞳にリューナは、吸い込まれていくような感覚を受ける。これ以上、アインハルトを直視しては、危険と判断したリューナは、今日の結果報告も踏まえて八神家の主である、はやてに訓練を終えたスタンプを押して貰う。
「リューナ君、顔が赤いで？」
「えっ…そうですか？」
必死に隠しているつもりだったが、直ぐに顔に出てしまう性格の為に、はやてはニヤニヤしながら、リューナを見る。その横では、はやてと浩一の子供で、リューナと同い年の八神千早が少し怒った顔でリューナを見ていた。
「リューナ、テスタロッサが迎えに来ているぞ？」
「えっ…すぐ行きます」
帰り支度をして、一礼した後、リューナはフェイトの待つリビングへと行く。リビングでは、浩一にリィンそしてユーノにフェイトが、くつろいでいた。リューナもリビングへと来て、今日の訓練結果をフェイトとユーノに報告する。
「リューナ、今日はアインハルトと訓練をしたんだよね？」
「はい…そうですけど、何か問題でもありましたか？」
少し顔を赤くしながら、リューナは言う。ユーノもリューナの気持ちを理解している為に、あえてそれ以上は言わずに浩一やリィンにお別れを告げた後、出て行く。その帰り道で、リューナはフェイトとユーノから自分用のデバイスを手渡される。だがデバイスを手渡

すフェイトの瞳には涙が溢れて、まるで自分にデバイスを渡したくないと言った感じさえした。
「リューナ…これを受け取ると言う事は、三人の遺志を継ぐと言う事だよ」
「お母さんとお父さんには感謝してる。でも、僕が受け継がなきゃならないんだ…聖剣士の宿命もエース・オブ・エースの称号も！」
決意は揺らぐこと無く、リューナの瞳に強く表現されていた。その瞳を見た二人は、互いに見つめ合って頷く。そして緑色に輝く【エグゼリアス】は二人の元から息子も同然なリューナへと送られる。リューナも大事そうに受け取り再びお礼をして、走っていく。
「ねえ、ユーノ…やっぱり子供は欲しいよね？」
「リューナも僕達の自慢の息子だけどね…祝ってあげよう僕達の息子の旅立ちを」
「そうだね…何時までも笑いあえるよう…祈ってるよ、リューナ」
二人の声は到底リューナには、届かなかったが二人の想いはしっかりとリューナの胸に届いていた。

## 第3話大事な人の遺志を継ぐ…宿命なの…（後書き）

多くの人に支えられた少年は、自らの力で魔導師となる。
次回　魔導新世紀リリカルなのはＦＵＴＵＲＥ
第４話忘れる事の無い大切な日々たちなの…
己の未来を掴む為に、少年は力を使う。
次回も、お楽しみに！！

## 第４話忘れる事の無い、大切な日々たちなの…（前書き）

今回の話で、リューナは管理局に入ります
では、どうぞ

## 第４話忘れる事の無い、大切な日々たちなの…

新暦１００年…４月２日、リューナは色々な事を考えながら幼馴染である千早と共に、時空管理局前へと来ていた。リューナは少し緊張しながら、入っていく。急に重たい空気がリューナの周りを支配して、辺りを見渡す。事前にフェイトやユーノに聞いていた事とは違い、リューナ達は忙しく走り回る局員の邪魔をしては悪いと思って、近くにあるベンチに座る。しばらく静かに待っていると、タイ焼きの袋を抱えた青髪の女性が来た。リューナは一目でスバルだと分かって抱きつく。

「スバルさん、久しぶりです」

「あれ、リューナに千早どうしたの？」

訳を話すと、少しだけ笑って二人を新人魔導師教育室へと案内する。ドアを叩くと、綺麗な女性の声が聞こえて、スバルの後に続きリューナと千早も入る。魔導師の教育室と言うには、少しだけ狭い感じもしたが、リューナはスバルに肩を叩かれて、少し顔を赤くしながら教導官の女性に向き返る。目の前には、フェイトと同じ黒い執務官の服を着たオレンジ色の髪で水色の瞳が印象的なティアナ・ランスターがいた。見た事も無い人物に千早は警戒するが、リューナの知り合いだと言う事が理解できると静かにティアナの腕を握る。

「スバル、あんたは戻らないと、ヤバいんじゃないの？」

「え～～～ティアの意地悪～～～」

「私は一応、心配して言ってあげたのよ！！」

これ以上居ると、ティアナの怒りを買うのが目に見えていたスバルは渋々、部屋を後にする。９歳の頃、会った時と何も変わらないティアナにリューナは安心感を覚える。そして、一通りの仕事内容を聞いた後、リューナと千早はティアナに別れを告げて、いつもの日課である八神家での訓練に来ていた。

「リューナ、今日はチーム戦をやってもらう…」

「チーム戦ですか…？」
「ああ、単独行動だけで任務は完遂出来ないからな…アインハルトと組んでもらうぞ」
「えっ…アインハルトさんと二人で戦うんですか？」
普通に千早と組んでチーム戦を行うと思っていたリューナはヴィータの言葉に、驚きを隠せなかった。
「ちなみに対戦相手は、あたしとシグナムだからな」
訳も分からぬままに、ヴィータに八神家の隠し訓練室へと連れて来て貰い、準備をする。既にＢＪを装着したアインハルトとシグナムは、訓練が始まるのを待ちわびていた。
「待たせたな、シグナム」
二人も準備が完了すると、訓練用のシミュレータが起動し、街中の様なバーチャル世界へと飛ばされる。
「今回の訓練は体力を設定する。例え、体力が無くなっても相棒が生き残っている限りは、各陣地に設けられた魔法陣で体力を回復する事が出来る。制限時間は…３０分だ！！」
ルール説明が終わって試合開始までのカウントダウンが始まる…リューナも少し緊張をしながらターゲットであるヴィータを見る。
『試合開始…』
電子音が聞こえると同時にヴィータのグラーフアイゼンが、リューナの頭上に振り下ろされる。突然の事に回避は間にあわず早々にリューナは回復エリア送りとなった。
（どうしよう…アインハルトさんの足を引張っているだけだ）
自分が回復している間もアインハルトは、ヴィータとシグナムの二人に互角に渡り合っていた。流石に覇王の名は伊達ではなく、さらに聖剣士の特訓も受けている為に反応速度や攻撃のスピードは普通の人間では捉えきれない速さだった。
「シューティング・アーチャー！！」
無数の光の槍が、ヴィータとシグナムの進撃を食い止めるその間もアインハルトは、リューナの方を心配そうに確認しながら自分の得

意なレンジへと誘っていく。
『リカバリー完了…高町リューナ、戦線復帰』
体力も半分まで回復した為に、リューナは戦線に復帰する。ヴィータとシグナムを足止めして居た、光の槍は、全て打ち消され、ヴィータはリューナに狙いを定めたまま、一気に突進をしていく。
「ラケーテン…ハンマー！！」
爆発力のある一撃は、確実にリューナへと向かうが流石に二度も敗れる訳にはいかないリューナもエグゼリアスでヴィータの一撃を受け止める。向こうの方がパワーが高い為に、徐々に押されるが、リューナは渾身の力を込めて、押し返す。急に突き離されたヴィータは、受け身を取る事も出来ぬまま、追撃を加えてきたリューナにやられる。だが、まだ未熟なリューナの一撃では、ヴィータの体力を半分にするのが限界だった。
「あれだけの力が、リューナの奴に有ったのか…」
全力で無いにしろ自分の攻撃を受け止めたリューナに驚きながら、ヴィータは再び構える。リューナもエグゼリアスを構えようとするが、先ほどの一撃が指先の感覚をマヒさせたらしく、握る事が出来なかった。
「ギガント・シュラーク！！ぶち抜けええええ！！」
既に満身創痍のリューナに受け止めるだけの力は無く、静かに目を閉じる。だが直後に感じた物それは、温かい何かだった。リューナは驚いて、目を見開くと目の前にアインハルトの顔をが映る。そして今の状況を理解するのに、さほど時間はかからなかった。
「アインハルトさん、すいません…また助けてもらって」
「これは個人戦じゃなくって、団体戦だよ…その事を忘れないでねリューナ」
静かに抱っこしていたリューナを降ろして、アインハルトはリューナに笑顔を見せる。リューナも顔を赤らめながら、アインハルトに笑顔を見せて自分が大丈夫な事を伝える。
「じゃあ、行くよ…シューティング・ディバスター！！」

「ディバイダー・バスター！！」
二人の遠距離魔法は、ヴィータとシグナムを捉えて勝負の決着はつく。一応チーム戦と言う事が少し分かって、リューナはお礼をする。
「チーム戦は一人の力だけじゃないんだからな…気を付けろよ、リューナ」
頷いて、走っていく。そして…新たな闇は直ぐそこまで迫っていた。

## 第４話忘れる事の無い、大切な日々たちなの…（後書き）

ミッドチルダに迫る脅威…そしてリューナは…
次回　魔導新世紀リリカルなのはＦＵＴＵＲＥ
第５話守る為に受け継いだ力、聖剣士なの！！
大切な人を失わぬ為に少年は自ら望まぬ力を使う！！
次回もお楽しみに～～～

## 第5話守る為に受け継いだ力、聖剣士なの…（前書き）

いずれ訪れる…世界の終焉…そして大切な者との永遠の別れ…
では、どうぞ～～～

## 第5話守る為に受け継いだ力、聖剣士なの…

次元世界ヴォーベント…ある悪意のある者が、目覚めようとしていた。だがフェイト達は、これから起きる悲劇を知らず、いつもの様に楽しい日々を過ごしていた。

「アインハルトさん、遅れてすいませんでした」

今日から時空管理局で正式に働くリューナは、尊敬する魔導師アインハルト・ストラトスと共に、ある施設で行われるオークションを守る命を受けていた。

「リューナ、朝ご飯は食べてきた？」

「えっ…食べてません」

お腹の音が鳴り、リューナは顔を赤くする。アインハルトも少しだけ笑いながら近くにある定食屋さんへと入る。

「アインハルトさん、ぼく…お金が無いんですけど」

「大丈夫、私が払うから好きな物、食べてね」

お言葉に甘えて、リューナは自分の好物であるコロッケ定食を頼んだ。アインハルトも焼き鮭定食を頼み、料理が来るまでの間、アインハルトから自分の父親と母親の話を聞いた。

「アインハルトさんは、お父さんと、どう言う関係だったんですか？」

「師匠と弟子の関係かな…あの人に会わなきゃ今の私は無かったと思うし…」

「お父さんって強かったんですか？」

「強いけど、普通の強さとは違う気配をいつも感じていた…優しさや温もりと言う名の気配をね」

話を聞く限り、リューナの父親は管理局でも英雄的な扱いを受けており、人一倍優しい人物だと言う事は理解出来た。それでも、リューナは父と言う自分に面識の無い人物に憧れもを感じていたが逆に不安も感じていた。

「どうかした…リューナ？」
「何でもありませんよ…それより、のんびりしていていいんですか？」
「大丈夫だから、良く噛んで食べようね」
笑顔でアインハルトが言うと、リューナは胸が高鳴って、急激に顔を赤くする。アインハルトは何かの病気かと思いリューナに顔を近づける。少しずつ近づく顔にリューナは直視出来なくなって、下を向きながら気持ちを紛らす為に急いで、ご飯を口へと運んで行く。
「ご馳走様でした」
「じゃあ、お会計をしたら向かおうね…」
お財布を出してアインハルトは会計を済ませる。その間、リューナも何か強大な悪意を感じていた。言葉では言い表せない程、凶悪な意志が、まるで自分を見ているような感覚に襲われる。
「リューナ、じゃあ行こうか」
差し出された手を握れずに、リューナは更に強大になる悪意に自分が取り込まれていく感覚を受ける。
「聖剣士…貴様の大切な者を壊す…」
（なんだ、この声…頭に直接響く）
耳を塞ぐが、意味は無く目の前に、これから起きるであろうヴィジョンが映し出される。
「うわあああああ」
急に怯え出したリューナにアインハルトは、どうすればいいのか分からずに、なのはが落ち着かせる為に抱き締めていた事を思い出して、アインハルトも震えるリューナを力強く抱きしめる。
「お母さん…？」
「大丈夫だからね…リューナ、心配はいらないよ」
優しい温もりがリューナの不安を消して行くが、リューナはアインハルトに少しずつ迫る殺気に体が言う事を聞かない事が分かった。
「聖剣士に絶望を…デスサイズ！！」
どこから飛んできたのか死神の鎌は、しっかりとアインハルトをタ

ーゲットにし迫る。リューナは依然、抱きしめているアインハルトを気絶させて、迫る鎌を迎撃する。
「敵はどこだ…」
（上から迫っているよ…リューナ！！）
突然、聞こえた声に導かれるようにリューナは上空を見る。確かに数本の鎌が浮いており、全てがアインハルトをターゲットにしていた。
「ウインド・スラッシュ！！」
風を巻き起こしリューナは風に乗りながら、鎌を切り落として行く。だが次々迫る鎌に目の反応は追いついても、体がついて行かず苦戦を強いられる。
（このままじゃ…アインハルトさんが…！？）
急に光が空間を遮り二人の魔導師がリューナの前に降りてくる。懐かしい感じを受けてリューナは涙を流す。そして、自分の母親と父親の名前を呼んで抱きつく。
「リューナ…大きくなったね」
「なのは母さん、本当に母さんなの？」
「君に渡す物があった、君が望む世界に向かう為の力だよ」
七色に光る綺麗な珠がリューナの体内へと入っていく。それと共に何故か見た事も感じた事も無い感覚やヴィジョンが見えて、リューナの持つエグゼリアスがスウェンの持つクライス・ソウルへと変化していく。それと共に目の色も赤と青のオッドアイになり、髪の色は少し青めの黒へと変化していく。
（これが…父さんの力？）
溢れだす力を制御できずにリューナは聖剣士のオートモードに振り回される。だが、それでも大雑把な制御は可能な為に目標だけを切り落とすと言う事は出来た。
「ハアハア…これで終わりか！？」
何かを感じてリューナが攻撃を避けると、目の前から物凄い悪意を全身に感じる。

「アインハルトは殺させない…」
明らかに気迫負けをしているが、リューナは武器を構えて無理やり怖い気持ちを押し込める。
「貴様が聖剣士か、今回は少し挨拶に来ただけだ」
「あなたは一体？」
「私はゼラン・マクエルさらばだ…若き聖剣士よ」
悪意が消えると共に聖剣士の力を消えて、再びアインハルトにより助けられる。
「無茶は駄目だよ…リューナ」
「アインハルトさん、すいませんでした」
相変わらず自分の気持ちも打ち明けられないまま、リューナはゼランの事を考えながらアインハルト共にオークション会場へと向かった。

## 第5話守る為に受け継いだ力、聖剣士なの…（後書き）

受け継いだ力…そして、迫る脅威？
次回　魔導新世紀リリカルなのはＦＵＴＵＲＥ
第６話　大切な人との永遠の別れ…なの？
自分の愛する人…そして世界は最期を迎える…
次回もお楽しみに？

## 第6話大切な人との永遠の別れ…なの？（前書き）

物語は急展開します。
では、どうぞ…

## 第6話大切な人との永遠の別れ…なの？

次元世界ヴォーベント…様々な悪意の集まる世界で、一人の男は過去に起きた惨劇の現場に居た。
「リュウ・スウェン…今は高町スウェンか…」
あの事件で生き残った少年、スウェンの事を考えながら全身から悪意を放つ男は、何かの準備を始める。それと共に、志半ばで散った多くの英霊達が集まって来ていた。
「世界は、間もなく終焉を迎える…そう、今度こそ神々の世界すら終焉させてやる」
儀式と言わんばかりに、謎の魔法陣を書いて行く。それに共鳴するかのように周りに浮いていた英霊達の魂が一つ、また一つと闇へと消えて行く。様々な叫び声が合わさって、男の耳に響くが、表情一つ変えずに、男は英霊の魂を生贄に捧げていた。
（レイヴンさん！？）
時空管理局で働くスバルは、確かに自分を救う為に自らウォーと一体化する道を選んだレイヴン・ロイトの声を聞いた。一時、仕事の手を止めて彼が必死に伝えようとする事に耳を傾ける。だが、ほとんどの言葉が理解できず、徐々にレイヴンの気配が弱まっていく事を感じた。
「レイヴンさん！！」
急に大声を上げたスバルに一緒に仕事をしていたティアナは驚く。ティアナが訳を聞こうとすると、スバルは有無を言わずに管理局の外に出て、空を見上げる。徐々に不気味な色へと変わっていく空の中にレイヴンの気配を感じる。そして、涙を流しながら空を見上げると、苦痛の叫びや多くの悲しみの叫びが頭の中に響く。必死で振り解こうにも、声はダイレクトに響き、言葉にならない叫びがスバル達、魔導師を支配していた。
「頭が…痛い！？」

苦痛の叫びは、魔力を持つ者に聞こえて、ある者は、その苦痛から解放される為に自らの命を絶ち、また違う者は声に導かれるがままに人を殺していた。声に囚われた多くの魔導師は普通の自我を維持できず声に導かれるか解放される為に、命を絶っていた。当然、その声は遠く離れたアインハルト達にも聞こえて、アインハルトは自我を維持できなくなっていた。

「全ての悲しみを終わらせる…」

今までのアインハルトとは明らかに違う感じが、リューナを支配しリューナもまた声に翻弄されていた。だが、聖剣士の力を受け継いだ事もあって、全ての心を支配される事は無かった。

「アインハルトさん…目を覚ましてください！！」

「あなたを殺す、それが世界の意思」

向こうが本気だと言う事は、リューナにも理解出来たがリューナはアインハルトを傷つける事が出来ずに、ただ攻撃を避けているだけだった。

（止めて…リューナを殺す前に…）

「！？…アインハルトさんの声？」

直接、頭に響く声はアインハルトの声に間違いなく、リューナは苦しんでいるアインハルトを見ている訳には行かずに、クライスを握る。だが、その眼には明らかにアインハルトとは戦いたくないと涙が零れていた。

「世界の為に…死ね、聖剣士！！」

「ごめん…アインハルト…」

急速に近づくアインハルトにリューナは、デバイスを構えて受け止める。そしてエグゼリアスの砲撃魔法によりアインハルトを吹き飛ばす。リューナは、宙を舞うアインハルトを空中でキャッチして、横にする。そしてしばらくすると、アインハルトは目を覚ます。既に声の呪縛は解けており、正常な思考のアインハルトがそこには居た。

「急いで戻ろう…皆が心配だ」

「ええ、行きましょう！？」
立ち上がると同時に、アインハルトは激痛を受けて倒れ込む。リューナもアインハルトの様子がおかしい事に気づいて、後ろを振り向く。
「えっ…嘘だ…アインハルトさん！！」
既に大量の血が流れて、アインハルトは息を引き取っていた。そして、その悲しみを洗い流すかのように雨が降り始め、リューナは動かないアインハルトの目を閉じて背負う。今まで感じていた温もりは感じずに、ただ悲しみだけがリューナを支配していた。

## 第6話大切な人との永遠の別れ…なの？（後書き）

最愛の人を亡くした少年に世界は更なる苦しみを渡す…
次回　第7話崩壊する…世界の中で…
消えて行く大事な人の命…もう戻らない世界…全てを失った少年は、
ただ一人で全てを終わらせる為に旅立つ…
次回もお楽しみに～～～

## 第7話崩壊する、世界の中で…なの…

あれから雨は、降り続けてリューナは、涙を流しながらフェイトや千早達の待つ管理局へと急いだ。

（アインハルト…もう少しだから）

雨で濡れている体を拭きもせずに、ただリューナは皆の待つ時空管理局へと向かっていた。だがリューナを待っていたのは、悲しい現実だった。辿り着いた管理局は、もはや自分の知る管理局ではなく、壁には多くの魔導師の血が付着して、リューナは絶望を受ける。そして中に入ると、この時間帯ならば多くの魔導師が仕事をしている筈だったが、辺り一面に血が付着して、首から斬られた魔導師や全身がバラバラになった魔導師も大勢いた。

（フェイト母さん、無事かな？）

静かに階段を上って、フェイトの働いている部署へと入る。既に多くの魔導師は息を引き取っていて、ただ一人だけ多くの魔導師の返り血を浴びながら立っていた人物がいた。

「リューナ、お帰り…」

「フェイト母さん、無事なんだね！！」

「重いよ～～～リューナ…」

何時もと変わらない声にリューナは安心感を覚える。今まであった事を、一通り話し終えるとフェイトもリューナの顔を見て、笑顔を見せる。

「よく頑張ったね…もう休んでいいよ」

急に殺気を感じて、リューナはフェイトから離れようとする。だがフェイトは信じられぬ程の力でリューナを持ち腰に隠していたサバイバルナイフを取り出す。そしてリューナにナイフが襲いかかると、何者かが飛ばしたナイフが、フェイトのナイフを弾きリューナは救出される。

「大丈夫か、高町リューナ？」

「えっと、あなたは…？」
「俺はレイヴン・ロイト…スバルから聞いてなかったか？」
記憶を辿って、リューナは思い出す。そして今まで起きた事を簡単にレイヴンから聞いて行く。
「つまり、ゼランを倒せば終わりと言う事ですか？」
「そう簡単な問題じゃないさ、現にゼランはもう死んでいる…」
言った意味が分からず、リューナが首を傾げるとレイヴンは空を見上げる。未だにリューナに聞こえる声もレイヴンにも聞こえておらず、ただ空を見ていた。
「リューナ、行くぞ…」
「えっ、どこへですか？」
「全ての始まりの地…アルハザードだ」
無理やり腕を掴まれたリューナは訳も分からぬまま、見知らぬ世界で目覚めた。

## 第7話崩壊する、世界の中で…なの…（後書き）

世界の終焉…そして…
次回　第8話再会…別れなの？
世界を救う為に、二つの心は一つとなる。

## 第8話再会…別れなの？

目覚めた場所、そこは全く見覚えの無い場所だったが、何故か懐かしい気配を感じた。
「あれ、レイヴンさん！！」
景色に気を取られている間にリューナは、レイヴンを見失う。そして懐かしい気配を乗せた風が通り過ぎて、リューナの目の前に3人の魔導師が現れる。
「久しぶりだね、リューナ」
「ヴィヴィオお姉ちゃん？」
目の前に現れた3人…ヴィヴィオ以外は記憶に無かったが、直ぐにそれが誰だかを理解する事は出来た。それでも信じられずにリューナは腕を握る事さえできなかった。
「リューナ、大きくなったね…なのはママは嬉しいよ」
「なのは母さん…？」
「記憶に無いのも無理はないよ…でも、私は君のママだから…」
ギュッと抱きしめられて、リューナは、なのはの温もりを感じる。今までフェイトから感じた温もりとはまた違った温もりがリューナを包み込み安心感を持たせる。
「スウェンパパも早く、早く！！」
「僕はいいよ…リューナだって知らないだろうし…！？」
一人で何処かへ行こうとすると、なのはの腕がスウェンを捕まえ、無理やりにリューナの目の前に出される。だが、当のリューナもスウェンを見ても、直ぐに父親だと感じはしなかった。
「リューナ、これが私達のパパだよ」
じっ～～～と見つめ、リューナは確認する。それでも、まだ理解の出来ないリューナは、再びじっ～～～と見つめる。徐々にスウェンも何か変な感覚に襲われ、その場を離れて行く。
「リューナ…今まで良く頑張ったね」

「これは私からのお礼だよ」
小さい頃にヴィヴィオに、して貰ったキスを受け取ってリューナは何かに誘われるように眠りについてしまう。そして残ったスウェン達は、世界を元に戻す為に全ての人と意識を共有して行く。
「なのは…行ってくるね」
「スウェン君、私も行くよ」
「でも…消えるのは僕だけで十分な筈」
「もう聖剣士の力だって弱っているし、二人で行こうよ」
悩んだ挙句に、スウェンは頷きヴィヴィオとリューナを残して世界の中心部へと向かっていく。
「急ごう…もう時間が無いよ」
二人は様々な障害を撥ね退けて、世界の中心部（ユグドラシル）へと到達する。既に世界を司る多くの命が溢れる木は、折れてしまっていた。
「ありがとう…なのは…元気でね」
「えっ、どう言う事スウェン君！！」
「世界を新しく造り変える僕は、その為に礎になるだけだよ」
「だったら、私も…」
手を伸ばそうとするが、世界の意思に邪魔をされ、なのはとスウェンの間に壁が出来て行く。それでも諦めきれない…なのはは、何度も何度も自分と彼を阻む壁を叩く。
「こんなとこで、お別れなんて嫌だよ…スウェン君！！」
（僕は元々、この世界の住人じゃない。それに君ならもう…生きていけるよ）
最期に聞こえた声は、なのはの耳に届いて、なのはも目を閉じる。
そして世界は…一時的な終焉の後に修復された。

## 第8話再会…別れなの？（後書き）

全ては長い夢だったのか、その真相を知る者は誰も居ない…
次回　最終話長く続く物語の続きへなの…
だが確かに少年が生きた証は世界にあった

## 最終話長く続く物語の続きへなの…（前書き）

全ては夢…それでも確かに生き続けた証拠が世界にあった…
魔導新世紀リリカルなのはの最終話です　では、どうぞ…

## 最終話長く続く物語の続きへなの…

「なのは、元気でね…」
最期に声が聞こえて、なのはが目を覚ます。
「おはよう、なのはママ」
最初は違和感を感じたが、直ぐに心の中を整理して、ヴィヴィオを優しい笑顔で見る。
「ヴィヴィオ、おはよう」
「なのはママ、泣いてたの？」
「えっ…なんで？」
指差した場所を触ると確かに涙が流れた跡が付いていた。でも何故、涙が流れたのか理解できずに、なのはとヴィヴィオはいつもの様に準備を始める。
「どうしたの、何かいつもと違うけど…」
「別に何でもないよ、早く朝ごはん食べちゃおう」
自分でも何かが変だと、薄々感じてはいるが、それが何故なのかは全く分からなかった。ただ心にぽっかりと穴が開いた感じだけは、感じられた。
「ヴィヴィオ、何か大事な事を忘れている気がするんだけど…」
「えっ、私は別に思わないよ？」
突然の質問に驚きながら、ヴィヴィオが答えると、なのはも気のせいだと思い込んで、朝ご飯を食べる。それから仕事の準備をしてヴィヴィオと共に家を出る。
「なのはママ、じゃあ気を付けてね…」
「ヴィヴィオも寄り道は駄目だよ」
笑ってヴィヴィオは走っていく。なのはも再度、仕事の資料をチェックしてから自分が勤める時空管理局へと走って向かう。
「あれ、今日は私一人かな？」
仕事場に着いて、なのはの周りの机を見る。皆、休暇を取って今日

は仕事を休んでいた。なのはも本来なら、休暇を取ってもいい日だったが、別にやる事も無い為に終わっていない仕事を終わらせる為に来ていた。
（やっぱり、休暇を取るべきだったかな？）
心の中で考えながら、仕事を進めて行く。いつもは色々な話が絶えず耳に入る為に、結構うるさかったが今日は、なのはだけの為に怖いぐらい静かな部屋だった。
「急いで終わらせて帰ろう…」
流石に少しだけ怖くなって、仕事のペースがアップして行く。最後に間違いが無いかだけ確認をしてデータをコピーした後、パソコンを閉じる。
「後は前にコピーしたデータと一緒に出せば、終わりだね！？」
早速データの入ったメモリーを取り出そうとバッグの中を探るが、固い物が指先に当たる感覚があって、一時的に探すのを中断して、指先に当たった宝石を取り出す。
（あれ…こんな指輪、持ってたっけ？）
見覚えの無い指輪に戸惑いながら、思い出す。だが既にイレギュラーの存在として消えた彼の事は、なのは達この世界で生きる者から消えている為に、思い出す事も出来なかった。
「一応、私の物だよね…」
バッグの中にある小さな袋にしまって、データの入ったメモリーを取り出す。
「これで完了っと…」
最後に上司に提出をして、なのはも家へと帰る。そして家に入ると、ヴィヴィオの友達であるアインハルトが遊びに来ていた。
「お邪魔しています、なのはさん」
「アインハルト、久しぶりだね」
「はい、それで一つ聞きたいのですが、何時も一緒に居るあの人は何処ですか？」
「？」

理解できずに、疑問符が頭の上に浮く。とっさに出てきた人物はユーノだったが、アインハルトはユーノではないと言う為に、なのはとヴィヴィオは困っていた。
「ユーノ君でもフェイトちゃんでもない人か…誰の事？」
「私も断片的にしか思い出せないんですが、あなたの事を大事に想っていた人です」
「私の事を大事に想っていた人…って、この指輪をくれた人かな？」
自信なさげに、なのはが先ほどの指輪を出すと、アインハルトは七色に光る特殊な指輪に何かを思い出す。だが、完璧に思い出せずに、なのはやヴィヴィオに話す事は出来なかった。
「アインハルトさん、何か分かった？」
「すいません…少し記憶が混乱していて、話す事は出来ません」
「別にいいよ、私も何かを感じてはいるけど、正体は分からないから…」
慰められたアインハルトは、二人にお礼をして家を出て行く。アインハルトが帰った後、夕ご飯を食べているとヴィヴィオがなのはに自分が今抱いている疑問をぶつけてきた。
「ねえ、なのはママ」
「うん、どうしたのヴィヴィオ？」
「何でヴィヴィオにはパパが居ないの？」
本当の事をヴィヴィオは知っている為に、理解もしていたが急にパパと言う単語が飛び出した事に、なのはも驚きながら今自分が感じている気持ちを少しずつ理解して行く。
「ヴィヴィオ、自分の事はもう知っている筈だよね？」
「知ってるよ、でも何故かパパが居た気がする…」
「ヴィヴィオ、パパってどんな人」
「えっとね、優しくて、なのはママや仲間の事を大事に想っている人だよ」
ヴィヴィオの言葉になのはの中の疑問も少しずつだが、答えが出て行く。だがまだ完全に思い出した訳ではない為にやはりもやもやす

る部分が多々あった。
「ねえ、なのはママが感じた者ってヴィヴィオと同じなのかな？」
「どうだろうね、でももう遅いし寝ようか」
二人が寝るには、でかい布団で横になると、ヴィヴィオは直ぐ眠ってしまう。
「スウェンパパ…」
（えっ、もしかしてそれが…？）
寝言を聞いて、なのはもようやく確信する。そして、寒い夜にヴィヴィオだけ家に置いて、ある公園へと来る。夜中だと言うのに、ここだけ昼間の様に明るく街灯も点いてはいなかった。
「聞こえているよね、スウェン君」
静まり返った公園になのはが名前を呼ぶと、次元が裂けて懐かしい気配が辺りを包み込む。そして指輪が次元の裂け目に吸収されると、中から確かに記憶の片隅にあった彼が現れた。
「あれ、ここは…？」
「スウェン君！！」
急に現れた女性に次元の裂け目から現れたスウェンは、受け身一つ取れずに倒される。
「逢いたかったよ…スウェン君」
「もしかして…なのは？」
ようやく状況が理解出来たスウェンも偶然？の出会いに驚いていた。
確かに自分は、イレギュラーとして消えた筈だったからだ。
「でもなんで僕はここに？」
「もしかしたら、君はこの世界の住人として認められたのかもね」
冗談交じりで、なのはが言うとスウェンは涙を流す。
「でも嬉しいな、こうしてまた君に会えたんだから」
「スウェン君、でも夢なのかな！？」
急に唇に感じた事のある熱さを感じて、なのは自身驚く。
「スウェン君」
「夢じゃないよ…ただいま、なのは」

「お帰り、スウェン君！！」

この世界のイレギュラーとして排除されたスウェンは、世界に認められて再び愛する者たちと生きる道を選んだ。

## 最終話長く続く物語の続きへなの…（後書き）

これで魔導新世紀リリカルなのは完結ッス

## 新世界編プロローグ許される世界…（前書き）

この話は、魔導新世紀リリカルなのはシリーズの一応続きの話です。
プロローグ以降は、新規小説として書いて行きます。

## 新世界編プロローグ許される世界…

イレギュラーの存在が許される世界…そこで多くの命は確かに生きていた。人々の記憶も徐々に戻って行き、ウォーや魔導機それにエルガストの事なども多くの人間は理解していた。
だが肯定される世界が存在すれば、全ての魂が認められない世界も存在する。そして、滅びの運命は少しずつ、そして確実に世界に迫っていた。
新暦７６年、４月３１日ＪＳ事件から1年が経過して、なのは達は平穏な日々を送っていた。その中でも、クロノ・ハラオウンや八神はやては、来るべき次元世界の消滅の日に向けて、着々と準備を進めていた。
「スウェン君、おはよう」
ポンと肩を叩かれ振り向くと、なのはが笑顔でスウェンを見ていた。
「おはよう、なのは…今日の予定は？」
「えっと、魔導機の起動テストの筈だけど…」
システムノートを見ながら、今日の予定を言う。スウェンも今日は魔導機のテストの為に、二人は色々な事を話しながら、魔導機が保管されている倉庫へと向かった。
「やっぱり、広いね…」
何度もテストの為に訪れた場所だったが、どうしても慣れずに、なのはとスウェンは自分たちを呼びだした張本人の八神はやてを探していた。
「はやてちゃん、お待たせ～～～」
「二人とも丁度ええ所に来てくれたな」
「もしかして、魔導機が完成したの？」
期待を込めて、二人がはやてに聞く。はやては、少しニヤニヤしながら後ろに置いてある白い魔導機と灰色の魔導機を二人に見せる。
「灰色の方がシュナイザーで、白色の方がエクセリアスや」

「シュナイザーにエクセリアスか…カッコいい名前だね。はやて」
「それでこの鍵が起動キーや」
少し顔を赤くした、はやての手から魔導機を起動させる為のキーを受け取って、二人は早速起動実験を開始する。最初の内は、魔力を同調させる為に激痛が走ったが徐々に痛みは消えて行き完全に同調が完了すると、二人は、まず基本を覚えて行く。
「同調しても、感情が高ぶったりすれば動かなくなる場合もあるからな…」
「はやてちゃん、3人って聞いていたけど、後の一人は？」
「大丈夫や、その内に分かる！？」
急に警告を知らせるサイレンが鳴り響いて、なのは達が乗る魔導機周辺の次元が揺らいでいる事が確認できた。だが突然の出来事に、はやてはどうする事も出来ず二人の生命反応は魔導機と共に消えさった。それと同時に魔導師が乗っていない筈の残り一機の魔導機も起動していた。
「フェイトちゃん、まだ完璧やない…下手したら死ぬで！！」
「……」
何も答えず、残り一機の魔導機も転移してしまった。
「八神はやて、彼らは選ばれたのですよ…この世界の代表としてね」
「ジェイル・スカルエッティ…」
後ろから来た人物の名前を言って、はやては振り返る。
「全ての魂が否定される世界ラグナロク…彼らは次元世界の為に旅立ったのです」
「ラグナロクか…でも3人だけで救えるんか？」
はやての疑問に、スカルエッティは笑みを浮かべる。
「大丈夫だよ、歴戦の戦士も世界を救う為にラグナロクへと向かった…」
「名前は明かさないんか？」
「今、君をここで殺す事など訳ないのだよ。機動六課部隊長八神はやて…」

銃を突きつけられて、はやては質問するのをやめる。
「だが君は殺さない、世界が平和になった時に治める者が居ないと困るだろう」
「何が目的や、スカルエッティ？」
「目的など無いよ、ただ彼らには勝って貰わなければ困る…それだけだ」
何を考えているのか理解できないまま、はやては三人の事を心配していた。

## 新世界編プロローグ許される世界…（後書き）

第1話からは、新規小説で書いて行きます。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0766s/

---

魔導新世紀リリカルなのはＦＵＴＵＲＥ

2011年5月24日21時47分発行